



【海外出張編】

「学術外交官」として交流

「地球には二つの衛星がある。一つはもちろん月だ。もう一つは日本の田中館博士だ。彼は毎年一回地球をまわってやってくる」。こう言ったのは、ノーベル賞物理学者のギョーム博士だった。国際度量衡会議や国際航空会議などで田中館愛橋と交流したギョームならではの言葉である。60歳で東京大学を自らの意志で辞めた田中館だが、彼の本当の活躍はそれから始まったとも言える。

田中館は生涯で68回の国際会議に出席した。海外出張の多くは、62歳になった1918（大正7）年から79歳の32（昭和7）年までの間に集中した。



田中館愛橋は国際連盟の知的協力委員会で、同じ委員のアインシュタインやキュリー夫人らとも交流を深める= 1927（昭和2）年（田中館愛橋記念科学館提供）

時代は大正から昭和の初めで、便利になったといわれたシベリア鉄道を利用して、欧州まで2週間はかかっていた。海外出張は短くても3カ月から半年が当たり前の時代だった。

70代半ばには1年にも及ぶ出張が入り、さすがに高齢を心配した家族が、2万円の生命保険をかけたという。

毎年のように地球を一周して西洋を

訪れた田中館の仕事は、万国測地学協会、万国地震学会、万国度量衡会議、国際学術研究会議、国際連盟知的協力委員会、地球物理学国際会議、航空連

盟会議など、実に多岐にわたった。訪れた国々も多かった。

しかも会議の合間に多くの科学者たちと交流を深めたり、当時の日本には無い専門書、研究書を買求めたりして本国に送っている。時には100分の1ミリの精度を誇る旋盤を求め、飛行機の購入選定の相談にもものという大活躍である。

田中館は次第に老齢となっていた、その人柄から多くの人に愛された。日本を代表する科学者として行く先々で尊敬され歓迎された。田中館が「学術外交官」と呼ばれたゆえんである。

1927（昭和2）年に撮られた「国際連盟知的協力委員会」の写真には、左側テーブル2人目に白髭の田中館が座っている。その奥にキュリー夫人が、右側のテーブル中央にはアインシュタインが同席している。他にもレントゲンらノーベル賞クラスの学者ばかりの中で、田中館は日本代表の誇りと『今やらねば』の気概を持って発言し、交流を深めたという。有用な情報を集め

て正しく判断し、日本に届け続けた。まだ電報しか使えない時代であった。

ちなみにこの会議は「科学の力で世界平和を実現できないか」について世界中の優秀な頭脳で考えるもので、ユネスコにつながる。この時、国際連盟の事務次長は盛岡南部藩出身の新渡戸稲造だった。

（中村誠二 田中館愛橋会事務局長）

【ミニコラム】 星になった田中館

小惑星の名に

芸西天文台（高知県）の関勉さんは、発見した小惑星に「Kimura（木村栄・天文学者=Z頂の発見で文化勲章）」と名付けた。その時、木村の恩師が田中館愛橋と知って、後に発見した小惑星（10300）に「Tanakadate（田中館）」と命名した。「地球のもう一つの月」といわれた田中館は本当の星になって、弟子の木村と共に地球を回っている。